

平成22年1月10日発行（毎月1回発行）昭和32年9月24日第3種郵便物認可

別冊

平成22年1月  
第718号

別冊

神奈川県医師会報

別冊神奈川県医師会報 第七一八号

新春随想増刊号2010年

平成二十二年一月十日発行（毎月一回発行）

発行所神奈川県医師会

定価五〇〇円

新春随想増刊号2010年

神奈川県医師会

# 神奈川県医師会報



2010年  
新春随想増刊号

年)、ドバイ(二〇一一年予定)、マレーシア(二〇一三年予定)と各国でレゴランドが誘致され成功しています。実は日本でも二〇〇〇年前後に千葉県が幕張市に誘致をプランニングしましたが、当時はまだレゴランドの日本国内での認知度があまりにも低くうまく行きませんでした。神奈川県初の全国的なアミューズメントとしていかがでしょうか。横浜近郊で羽田空港・横浜駅・新横浜駅のいずれからもアクセスが良い土地がもしあれば……。きつと大成功するでしょう……。必要な土地は意外に小さくデンマーク本国ではわずか一万三千坪で運営しております。

神奈川県内でお力のある方の御協力をお願い申し上げます……という事を真剣に考えていましたら、何と最終日に英国ロンドン行き格安国際便に乗り遅れてしまいました。フライトが勝手に一時間早く(しかも朝六時三〇分台に)出発してしまっていたのです。その結果、ロンドンでの妹の結婚式を気にしつつ、さらにもう一日多くレゴランドを満喫してしまいました。(大和市 橋本クリニック)

ケアホームを横浜青葉台に決めていたので、先に入所していた母のところへ収容した。その後毎週末見舞いに行く際には、毎回大好物の大福餅の五個パックを持って行ったのであるが、いきなり父は二個食べ、三個目はゆっくり味わうのである(戦前の窮乏生活の焼き込みだろう)。わたしの見積もりでは、四月までに計六〇個は食べたと思う。しかし、四月一三日の夜、ホームの部屋でCPAの状態で見られ、蘇生しながら救急搬送され、S大学F病院に四分後に到着したのである。

連絡を受け家内と自動車に飛び乗って首都高速を走行中にERの担当のH先生から電話が入り、「蘇生には成功したが既に瞳孔散大」などの説明を受けた。私は「挿管、人工呼吸器装着は病院到着まで待つてもらえないか」と依頼したのであるが、既に装着済みとのことであった。病院に到着しERに行くと丁寧な説明があり、自ら懐中電灯を拝借して、瞳孔散大、対光反射なしを確認し、「こりゃ、あかんわ」と覚悟した。その日は一旦自宅に帰り、翌朝眠気眼で通常どおり小田原市立病院に出勤すると、うれしいことに病理解剖の依頼が入っており、しょぼしょぼと地下の解剖室で解剖をやっていた。Tommy Lee Jonesあたりが

## 父の死を看取つて、病理解剖して —戦い済んで日が暮れて—



長谷川章雄

実は一昨年平成二〇年の春、九二歳になった父龍雄が死に至るほぼ全経過を伴走しながら近接支援と観察をした。父は、戦前B二九迎撃目的に開発された陸軍の高高度試作戦闘機、戦後の自動車開発の設計主務者の経歴を持つ。平成一九年九月二三日、母の介護に献身していた父であるが心身の疲労が蓄積し、力尽きたのか、二人で外出中に転倒し、近くの至誠会病院に救急搬入された(母も認知症のため、その際の状況不詳)。急性期リハビリを終え、一〇月二三日に県内の鶴巻温泉病院に転院した。ここでは本来の強い意志を遺憾なく発揮し、ついには施設内の特殊環境ではあるがかなりの距離を自立歩行するまでに回復し、一二月二四日には退院となった。それまでに家人が調査して、

「うれしくて涙が出てくるぜ」と独り言を呟くプロットでありました。その後四月二九日に死亡宣告がなされるまで約二週間経過したが、実際の死亡は父の大脳の神経細胞が四〇分間の乏酸素性障害の結果一つずつ脱落していった一三から一四日にかけての夜中であつたと思う。その夜私は床の中で一睡もできないでいた。病理医の経験から言つて、自発呼吸の喪失後一週間も人工呼吸器の管理下状態が続くと確実に大脳は呼吸器脳症に陥り(静脈還流障害説あり)、ドロドロに融解してしまっているの、回復の可能性は限りなくゼロである。したがってその後はいかにして天のお召しに載せるかだけを苦慮していた。しかし、入院先病院に迷惑をかけてはいけないので、東大医学部同級であり救急医学会の重鎮である有賀君(昭和大学教授でH先生も周知)とも電子メールを利用しながら三人で善後策を協議した。とにかく父は大東亜戦争経験世代のやたらと丈夫な人であり、体の各パーツ、補器類はアイシン精機かデンソー製か?と疑いたくなるように、心臓などの各臓器は耐久性、抗湿性を証明していた。脳波などの必要なデータを揃え、有賀君の専門家の助言も聞いて、消極的な延命治療漸次低減作戦(輸液量最小、抗生剤点滴中止、供給酸素最低レベ

ル)を採用しても変化は顕著でなかったが、四月二十九日にやっと神のお召し車(もちろんトヨタ車を手配)が天国から到着したのである。知らせを受けて母、孫たちを含む家族全員が夜遅くにベッドサイドで手を握り見守る中、最終的に心電図上の波形が乱れ、次第に減衰、消失していった。連休明けの朝には、脳脊髄を含む全身解剖を依頼し、私も着替えて先方の担当病理医のネーベンとしてお手伝いさせていただき、持参したデジタルカメラで記録した。ちょうど学生実習中であり、M教授が学生参加を依頼されたのでそれも気軽に同意した。その後しばらくして、担当のT先生が当方の願いどおりガラス標本を送ってくださったので、脳を含めて全臓器の状態が組織学的にも確認できた。今回のように個人の生活歴(人生)、病歴を完璧に知っている症例の場合、いかに病理解剖が有益であり、また臨床病理の相関(chinico-pathologic correlation)が美しくとれるものであるかに感動した次第である。

脳は開頭時すでにトロトロであり、補手の方が丁寧で、私も脇からガーゼでくるみながら支え、かろうじて原型を保持してフォルマリンに漬けることができたが、顕微鏡的にも無酸素脳症に呼吸器脳脊髄症が加わり神経細胞は完全

に脱落していた。回復の可能性はゼロである。冷徹な現実を直視する勇気のない偽善者が跋扈するから延命治療の議論は混乱する。なお詳しい経過は画像、検査データをふくめてわたしのホームページ

<http://www.geocities.jp/pinealgyu/tatsuo/tatsuo.htm>  
または、

<http://drhasegawa.org/tatsuo/tatsuo.htm>

の下三分の一に英文で掲示してあるので、興味のある先生は見てください。  
(小田原市 小田原市立病院)

## ダマヴァンド山登山と 垣間見たイラン



原田俊行

「悪魔の詩」問題を起こしたイランという国を一度見た  
いと思っていた時、イランの最高峰ダマヴァンド山(五六